主日礼拝説教「霊性を取り戻す、ということ」予稿

日本基督教団石神井教会　2023年6月18日

【旧約聖書日課】申命記　8章11～20節

11わたしが今日命じる戒めと法と掟を守らず、あなたの神、主を忘れることの
ないように、注意しなさい。12あなたが食べて満足し、立派な家を建てて住み、
13牛や羊が殖え、銀や金が増し、財産が豊かになって、14心おごり、あなたの神、
主を忘れることのないようにしなさい。主はあなたをエジプトの国、奴隷の家か
ら導き出し、15炎の蛇とさそりのいる、水のない乾いた、広くて恐ろしい荒れ野
を行かせ、硬い岩から水を湧き出させ、16あなたの先祖が味わったことのないマ
ナを荒れ野で食べさせてくださった。それは、あなたを苦しめて試し、ついには
幸福にするためであった。17あなたは、「自分の力と手の働きで、この富を築い
た」などと考えてはならない。18むしろ、あなたの神、主を思い起こしなさい。
富を築く力をあなたに与えられたのは主であり、主が先祖に誓われた契約を果た
して、今日のようにしてくださったのである。

19もしあなたが、あなたの神、主を忘れて他の神々に従い、それに仕えて、ひ
れ伏すようなことがあれば、わたしは、今日、あなたたちに証言する。あなたた
ちは必ず滅びる。20主があなたたちの前から滅ぼされた国々と同じように、あな
たたちも、あなたたちの神、主の御声に聞き従わないがゆえに、滅び去る。

【使徒書日課】使徒言行録　4章5～12節

5次の日、議員、長老、律法学者たちがエルサレムに集まった。6大祭司アンナ
スとカイアファとヨハネとアレクサンドロと大祭司一族が集まった。7そして、
使徒たちを真ん中に立たせて、「お前たちは何の権威によって、だれの名によっ
てああいうことをしたのか」と尋問した。8そのとき、ペトロは聖霊に満たされ
て言った。「民の議員、また長老の方々、9今日わたしたちが取り調べを受けて
いるのは、病人に対する善い行いと、その人が何によっていやされたかというこ
とについてであるならば、10あなたがたもイスラエルの民全体も知っていただき
たい。この人が良くなって、皆さんの前に立っているのは、あなたがたが十字架
につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリ
ストの名によるものです。11この方こそ、

『あなたがた家を建てる者に捨てられたが、
隅の親石となった石』

です。12ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべ
き名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」

【福音書日課】ルカによる福音書　8章40～56節

40イエスが帰って来られると、群衆は喜んで迎えた。人々は皆、イエスを待っ
ていたからである。41そこへ、ヤイロという人が来た。この人は会堂長であった。
彼はイエスの足もとにひれ伏して、自分の家に来てくださるようにと願った。42
十二歳ぐらいの一人娘がいたが、死にかけていたのである。

イエスがそこに行かれる途中、群衆が周りに押し寄せて来た。43ときに、十二

年このかた出血が止まらず、医者に全財産を使い果たしたが、だれからも治してもらえない女がいた。44この女が近寄って来て、後ろからイエスの服の房に触れると、直ちに出血が止まった。45イエスは、「わたしに触れたのはだれか」と言われた。人々は皆、自分ではないと答えたので、ペトロが、「先生、群衆があなたを取り巻いて、押し合っているのです」と言った。46しかし、イエスは、「だれかがわたしに触れた。わたしから力が出て行ったのを感じたのだ」と言われた。47女は隠しきれないと知って、震えながら進み出てひれ伏し、触れた理由とたちまちいやされた次第とを皆の前で話した。48イエスは言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」

49イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人が来て言った。「お嬢さんは亡くなりました。この上、先生を煩わすことはありません。」50イエスは、これを聞いて会堂長に言われた。「恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われる。」51イエスはその家に着くと、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、それに娘の父母のほかには、だれも一緒に入ることをお許しにならなかった。52人々は皆、娘のために泣き悲しんでいた。そこで、イエスは言われた。「泣くな。死んだのではない。眠っているのだ。」53人々は、娘が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑った。54イエスは娘の手を取り、「娘よ、起きなさい」と呼びかけられた。55すると娘は、その霊が戻って、すぐに起き上がった。イエスは、娘に食べ物を与えるように指図をされた。56娘の両親は非常に驚いた。イエスは、この出来事をだれにも話さないようにとお命じになった。

「イエス・キリストの名によって」【こども説教のために】

天に昇られた主イエスがお約束くださった聖霊降臨を経験して、弟子たちには、特別な力がみなぎるようになっていました。

ある日、使徒のペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行くと（使徒 3:1）、そこに、生まれながら足の不自由な男が座っていました。彼は二人を見ると施しを乞いましたが、二人は彼を見つめて言いました。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」（同 3:6）。すると、彼は躍り上がって立ち、歩き出しました。

二人は、自分たちの中にみなぎっている力の正体を知っていました。主イエスが「あなたがたのうえに聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」（同 1:8）と言われていたのです。それは、主イエスがお持ちになられていた力でした。天から降って来られる聖霊を信じた主イエスが、ご自身の生涯を通してお働きくださる神の御力としてお示しになられた力でした。

弟子たちは、その同じ力が自分たちの生涯の歩みを通してもお働きくださることを願いました。そう願って、自分たちの名ではなく、「**イエス・キリストの名**」を掲げて歩み始めました。主イエスと結ばれるためにその名によって洗礼を受けました。彼らは、その道を共に生きることを選んだのです。

「起きなさい」

母教会で過ごした青年時代、若い伝道師がしきりにこう言うのを耳にしました、曰く、「二千年前の使徒の時代には聖霊がビュービュー吹きまくっていたけれども、残念ながら現代の教会では聖霊はもう吹いていない」と。伝道師がそのように考えているということを知って、少し驚きました。

実際は、二千年前、使徒たちの教会が歩み始めた時代にも、聖霊が吹きまくっているということはなかったと思います。そうであればこそ、主イエスは、「**聖霊を受けなさい**」（ヨハネ 20:22）とおっしゃられたのでしょう。主イエスが死んで三日目にご復活なさったのは、弟子たちが「聖霊」を取り戻すためであったと言っても、あながち間違いではないでしょう。

会堂長ヤイロの一人娘が、死にかけていました。十二歳の娘です。幼児の死亡率が高かった時代、十二歳まで育った彼女は、ようやく大人の仲間入りをするところでした。その娘が、死にかけていました。足もとにひれ伏して、自分の家に来てくださるようにと願う父親の願いに、主イエスは応えられました。到着が遅れて、周りの者たちが娘はすでに死んでしまったと告げても、主イエスは彼女の横たえられた部屋に入り、呼びかけられたのです、「**娘よ、起きなさい**」と。娘は、すぐに起き上がりました。

福音書は、そのとき、「**娘は、その霊が戻って、すぐに起き上がった**」と伝えています。彼女の霊が取り戻されたのです。失われていた霊が取り戻された。それが、死んでいると思われた者が起き上がったときに、起こっていたことだと、言うのです。

もちろん、霊は見えないのです。「霊が戻って来た」と言っても、鳩のような姿をしてそこに現れたというわけではなかったでしょう。あるいは、霊感のあるスピリチャルカウンセラーには見えた、というような代物でもなかったでしょう。そのようなものである必要もなかったでしょう。なぜなら、娘は起き上がったからです。死んだ者として横たえられていましたが、起き上がり、両親のもとに戻されたのです。

その前に、娘が死んだと主張していた人々に向かって主イエスは、「**ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われる**」と言われていました。両親も、周囲の者たちも、信じていなかったのです、娘の生かされていることを、娘の命を。彼らの間で「霊」が失われていたのです。

その信じない彼らに代わって、主イエスは、娘の手を取りました。死んだと思われている者に触れ、手を取り、呼びかけ、起き上がらせられました。娘を両親に生きた者としてお渡しになられたのです。娘と両親との間を取り持ってくださったのです。そのようにして、彼らの間で、その娘の「霊」は取り戻されたのです。

「安心して行きなさい」

聖霊降臨を祝う教会は、わたしたちがこの世界で生きている間にいつのまにか見失っている「霊」を取り戻そうとしているのでしょう。

それは、わたしたちがいわゆるスピリチャルな霊感を持つようになる、というようなことではありません。それは、わたしたちが、身体は個々に別々であっても、互いを結びつける、人として本質的に不可欠な何かのことです。それ無くしては、わたしたちが互いを信じ、受け入れ、認め合い、人として生きた存在であることができなくなってしまうような何かのことです。

「信じること」が失われていたヤイロの家族の中で、あの娘は、死んだ存在になってしまっていました。「信じること」が必要でした。娘を「生きている者」として認め、受け入れ、「信じること」が必要でした。そうすることができるようにと、主イエスは取りなしてくださったのです。ご自身が、この娘を「信じること」によって。

ヤイロの娘のもとに向かう途上で、主イエスは、別の一人の娘を見出されました。十二年間も出血が止まらず、もはや誰も助けてくれる者がいなくなってしまっていた人です。彼女の病を気の毒に思っている者もいたでしょうが、財産も使い果たしてしまった今となっては、だれも彼女に関わろうとは思わなくなっていたことでしょう。それでも、大勢の人だかりに紛れて、彼女は、主イエスに近づこうとしていました。だれも彼女のことを気にもかけない中で、彼女は、主イエスの服の房に触れることができたのです。

その彼女に、主イエスは気づかれました。服に触れたことに気づかれた、というのではないでしょう。大勢の者が代わる代わる、主イエスの服や手足に触れてきていたのです。そのような中で、主イエスは、**力が出て行ったのを感じ**られたのです。大勢の者たちの中で、そこにいる誰か一人、何か違うことにお気づきになられたのです。大勢の中で、まるで一人無視されているような者がいる。邪険にされているような者がいる。にもかかわらず、必死にそこにとどまり、ご自分のもとに近づこうとしてきた者がいる。

主イエスは、彼女を見出されると、こうお告げになられました。「**あなたの信仰があなたを救った**」。彼女は、「信じること」をまだ諦めていなかったのです。彼女の「信じること」と、主イエスの「信じること」が、そこで結びついたのです。生きた存在として認め合うものとなったのです。

主イエスは告げられます、「**安心して行きなさい**」、直訳すれば、「平和のうちに出て行きなさい」と。彼女は、出て行くことができるでしょう、人々の中に、平和の使者として、その力を与えられて。

その力は、聖霊降臨によって、研ぎ澄まされた霊の交わりに生きられた主イエスの霊性によって、わたしたちにも与えられているのです。